University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2021(令和3)年 1月20日発行〔隔月刊〕

［特 集］学び合うキャンパス 最前線

大学時報

NO.396
2021. 01

日本私立大学連盟

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

東洋学園大学

本郷キャンパス1号館　フェニックス・モザイク「岩間がくれの菫花」

フェニックス・モザイク「岩間がくれの菫花」

新制東洋女子短期大学（英語科）開学10周年に際し、新校舎を飾るシンボルとして同窓会から寄贈されたタイル壁画である。1961（昭和36）年2月完成。本年、創建60周年を迎える。

デザインと制作指導は建築家の今井兼次（1895〜1987）。「岩間がくれの菫花」ほか屋上3作品、1964年増築時の1作品、計5作の総称がフェニックス・モザイクである。「岩間がくれの菫花」は東洋学園大学に改組後、2007年の建て替え時に保全し、文京区の文の京都市景観賞「景観創造賞」を受賞した。

制作当時の本学は旧制東洋女子歯科医専の廃止後、未だ戦後復興の途上にあった。今井はささやかな学校の佇まいから「岩間に隠れて咲くすみれの花」（ワーズワース『ルーシー詩篇』）を基調として、対応する一つの星を「詩的に交錯した2本の線で結び、太陽の永久性を伴奏として配置」した。

フェニックス・モザイクは、皇居の桃華楽堂（1966年完成）に結実した日本各地に5作ある連作タイル壁画の総称でもある。主材料は信楽などで焼いたタイルであるが、今井はそれぞれの地で、施主や地域など関わる人々に不要になった陶器の提供を求めた。フェニックス（不死鳥）とは、それ自体は価値のない陶片も数多く集まれば大きな生命力を得て、芸術の中で永続性を保つという考えに基づく。関わる人々の思いを壁画に込める意味もあり、本学でも学生、卒業生、教職員が日用雑器を持ち寄った。

建て替えで失われた屋上等4作品の断片は東洋学園史料室で保存、展示しており、今井兼次の建築を取り上げる他館展示にも貸し出している。

University Current Review

大学時報

2021.1／NO.396

CONTENTS

だいがくのたから　東洋学園大学
大学点描　九州産業大学　10
巻頭言　創立100周年を見据えて　榊泰輔
年頭所感　ポストコロナ時代における私立大学の重要性　長谷山彰
視点　生涯学び続ける力を付ける教育を目指して　真銅正宏　12
座談会　「教養教育」とは何かを考える　18
梅﨑透／小林傳司／金山勉／長谷川知子／（司会）長野香
特集　学び合うキャンパス 最前線　34
場が〝学び〟と〝働き方〟を変える　36
―梅光学院大学の新校舎での試み―　樋口紀子
アクティブ・ラーニングの全学展開に向けた施設・設備の整備　42
―創造性・社会性を育むキャンパスの教育装置化―　川口敏弘
スチューデントコモンズで受ける遠隔授業　48　金栄緑
価値ある学びの場を提供し続けるために　52　井上誠
社会の変化に即応できる人材に不可欠な4つの力を育成するための空間　56
―学生が互いに刺激し合えるTechno Cube（19号館）―　黒田輝／大山龍一郎
INIADという挑戦　60　坂村健
ずいそう　最初の卒業証書　―京都精華大学の友愛の精神―　66　石田涼
小特集　コロナ禍における入試広報　68
オンラインオープンキャンパスの可能性　70　小林順

表紙：ヤマノイモ

ヤマノイモ科のつる性多年草。別名、自然薯。日本特産で本州・四国・九州の山野に生えます。芋をすりおろして「とろろ」として食べるほか、葉の付け根にできる「むかご」と呼ぶ球芽も食用に用います。東日本を中心に、正月には一年の無病息災を願ってとろろを食べる習慣があります。

74 コロナ禍と入試広報 ―デジタル・対面・学生参加― 村上隆

78 その時、入試広報の現場では ―緊急事態宣言からポストコロナへ― 岡田隆

80 コロナ禍における「入試業務」のオンライン化 岡田遼介

私の授業実践～教育現場の最前線から～

84 演劇の実践教育 ―オンライン演劇の製作― 須川渡

明日への試み

88 龍谷大学先端理工学部 Society 5.0時代における新たな理工系教育課程 松木平淳太

加盟校の幸福度ランキングアップ《並木道編》

96 戦争と桜並木 ―和解の贈り物― 富岡徹郎

98 御井学舎の欅並木道 大矢野栄次

100 ケヤキ並木と持続可能な未来への活動 池上敦子

クローズアップ・インタビュー

102 株式会社高橋書店 書籍事業部 編集部 山下利奈さんに聞く （聞き手）川島葵

新会員代表者紹介 110 京都産業大学／和光大学

執筆者・出席者のご紹介（掲載順） 111

私大連ニュース・私大連TOPICS 113

編集後記 116

九州産業大学は2020年、創立60周年を迎えました

九州産業大学は1960年、「産学一如」を建学の理想とし、商学部商学科の単科大学として開学しました。「産学一如」とは、「産業と大学は車の両輪のように一体となって、時々の社会のニーズを満たすべきである」という先進的な概念です。

2016年からは、3年間をかけて文系・理工系・芸術系の全学部を社会のニーズに対応した形に再編。9学部21学科・大学院5研究科と短期大学部を有する、学生数1万人超の総合大学に成長しました。

独自の教育プログラム「KSU基盤教育」「キャリア教育」

創立60周年記念事業の一環として、今春、スポーツ複合施設「大楠アリーナ2020」を竣工しました。約5,000人を収容できる西日本最大級のメインアリーナや、疑似高地トレーニングが可能な低酸素ルームなど最先端の設備を完備し、将来のトップアスリートの育成を目指しています。

全員が2年間全学共通で受講する「教養教育」「外国語教育」「専門基礎教育」で構成された「KSU基盤教育」や、99.2%という高い就職決定率を誇る「キャリア教育」など、充実した独自の教育プログラムを通して学生へのきめ細かな支援を行っています。

国際社会で活躍するグローバル人材の育成

本学は10カ国・地域の23大学と国際交流協定を締結し、活発な国際交流を展開しています。

グローバル化への対応強化の一環として、今年度後学期から、国際社会の最前線で活躍できる学生を育成する「グローバル・リーダーシップ・プログラム」（以下GLP）を開始しました。

9月には、九州唯一の国際機関である、国際連合人間居住計画福岡本部（国連ハビタット福岡本部）と包括的連携協定を締結。同本部の国際業務実務者がGLPの講師となり、受講学生の国際的教養と知識の修得を促します。

産学官連携プロジェクトで地域に貢献

全学部で110以上ある「KSUプロジェクト型教育」では、学部・学科の枠を越え、地域や企業、行政と連携して、商品開発やプロモーション、技術開発などに取り組みます。

「『CAお福さん』博多人形プロジェクト」では、伝統工芸品を若者の視点から新たに開発しようと、芸術学部と造形短期大学部の学生が世界の航空会社の制服をモチーフにしたオリジナルの博多人形を制作しました。

新型コロナウイルス感染症に関わる緊急支援

新型コロナウイルス感染症に関わる対応策として、学生に対して総額約5億円の緊急支援策を実施しました。

全ての学生に対する一律3万円の緊急支援金や、1万円を上限とした教科書・教材の購入補助の学習環境支援を行ったほか、家計が急変した学生には2万円の家計急変給付金で支援。さらに、大学・同窓会・後援会が協力した学生食堂のテークアウト商品への購入補助や、就職活動に関わる履歴書などの発行手数料と大学からの郵送料を無料化しました。

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY
SINCE 1960

創立100周年に向けたビジョン

新たな知と地を
デザインする大学へ

— もっと意外に。もっと自由に。 —

私たちは、固定観念にとらわれず、
もっと意外に、もっと自由に挑戦し続けます。
そして、新たな叡知を産み出し、
活力ある地域、世界をデザインする
大学を目指します。

University Current Review

大学時報

2021.01／NO.396

創立100周年を見据えて

榊 泰輔　九州産業大学学長

本学は、2020年の創立60周年に向けて、「KSU基盤教育」や独自のキャリア教育、全学部の再編など、教育・研究の改革に取り組んできた。

今後数十年で、大学の姿は劇的に変わるだろう。グローバル化やネットワーク、生涯にわたる持続的な学びなどの空間的・時間的変化に専門や教養などの深さと広がりが加わり、「総合的な知の基盤」を培う場となる。

どのように環境が変化しても、自分の「軸」を持って活躍できることが大切だ。本学では、文・理・芸を横断的に学ぶとともに実践力を鍛える教育を推進し、「総合大学らしい新しい体験」を与えたい。

新生・九産大として、創立100周年に向けたビジョン「新たな知と地をデザインする大学へ―もっと意外に。もっと自由に。―」の実現を目指していく。

年頭所感 二〇二一

ポストコロナ時代における私立大学の重要性

長谷山 彰　日本私立大学連盟会長、慶應義塾長

新年おめでとうございます。

年頭に当たり、日本私立大学連盟加盟法人並びに加盟大学の益々のご発展と、ご関係の皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。

２０２０年は、新型コロナウイルスの拡大によって世界が混乱状態に陥りました。各国の経済やグローバル化に打撃を与えただけでなく、「教育」も大きな影響を受け、日本の教育システムの課題が顕在化しました。しかし、この混乱下において私たちが学んだことも多くあり、これからの大学教育のあり方を考える契機ともなったのです。

世界の主要大学は、この危機を乗り越え、交換留学や共同研究などをこれまで以上に推進するために、高度な教育研究のオンライン化に取り組んでいます。この流れは世界レベルで加速していくでしょう。国際共同研究の成果は大学ランキングにも直結するところであり、この流れに乗ることができなければ、日本の大学は国際化に取り残されてしまいます。また疲弊する地方の創生を考える上でも、大学間連携やリカレント教育を推進するに当たっても、質の高いＩＣＴを活用した遠隔教育と対面授業を組み合わせて効果的な教育方法を見いだすことが重要であり、新たな高等教育のあり方を示すときに来ています。

昨年の日本私立大学連盟（以下「私大連」）の事業を顧みましても、新型コロナウイルスの影響を大きく受けました。私大連事業の特徴は、〝会員法人の相互支援と協働〟によって私立大学に貢献することです。会員法人の皆さまの智恵と経験を集積し、メンバーシップによって調査研究活動や研修、ワークショップなどが行われています。そのほとんどを対面により運営していますが、昨年は、多くの事業をオンラインに切り替えて会員法人に向けた情報発信を積極的に行い、ネットワークのハブ機能を果たすべく取り組みました。

また、会員法人から寄せられた意見をもとに、数多くの新型コロナウイルスに関する要望書を取りまとめ、文部科学省だけでなく関係機関に働きかけを行いました。とりわけ、学びを断念することのないよう、経済的に困窮する学生に対する支援やオンライン授業のための環境整備支援を強く主張し、一定の成果を得たところです。これら学生に関する要望は、国公立大学や日本経済団体連合会とも連携し、共同要望として公表することで、設置形態や産学を越えた広がりを見せました。私大連では今後も、これらの要望を継続的に主張していく所存です。また、混乱の中で、各私立大学は、教育の質を考えた上でシラバスを見直しながら学生の通信環境のサポートやオンライン授業に対応しており、後期からはできるだけ対面授業を取り入れるべく、キャンパスの新型コロナウイルス感染防止策を講じながら教学の体制を整えています。このように、多様な教育カリキュラムを編成する私立大学の教職員の負担は増えていることを社会に正しく理解していただくため、私立大学の実態と課題を発信してきました。

ところで、教育行政を見てみますと、昨年は、新型コロナウイルスの対応だけでなく、高等教育無償化論から端を発して高等教育の修学支援新制度が導入され、大学入学共通テストでの英語民間試験の活用の見送り、加えて、にわかに「9月入学」の議論が浮上しました。また、私立学校法が改正された矢先に大学のガバナンス論が進められており、ポストコロナを見据えた対面とオンライン授業のあり方や大学設置基準の見直し、新たな国際戦略などの議論が始まっています。私大連では、これら国の議論は、大学現場の声を踏まえて十分な議論を重ねるべきであることを常々申し述べています。

「第4次産業革命」と呼ばれる産業構造の大きな変化、人口減少時代、「人生100年時代」の到来、地方創生とグローバル化などの社会課題に加え、今般の新型コロナウイルスによる混乱の中で、地球規模の課題に取り組み、世界で活躍する人材が必要となります。このような変化の時代を生き抜くための高度な知識と多様な能力を備えた人材の育成は、私立大学の自由な発想に基づく多様な教育研究のダイナミズムによって成されるものと信じております。

会員一体となってこの難局を乗り越え、この2021年が、ポストコロナ時代に向けた大学改革を進めていく年となりますよう心から祈念して、私の新年のご挨拶にいたします。

視点

生涯学び続ける力を付ける教育を目指して

真銅 正宏
追手門学院大学学長

1．大学の教育とは何か

本学の第1期卒業生に、芥川賞作家で、現代の日本を代表する作家宮本輝がいる。本学の附属図書館内には「宮本輝ミュージアム」があり、氏の小説の原稿や、万年筆などの貴重な品々を保管し、半期ごとに企画展を催している。2019年のホームカミングデーには、校友会の主催で、氏と私の対談という催しがあったが、実際は私が日本近現代文学研究者として聞き手に徹し、とても幸福な時間を過ごすことができた。

この宮本輝氏の小説に、やや耳の痛い話であるが、大学の教育について述べている箇所がある。『海岸列車』という作品の中の、主人公の一人である夏彦の述懐である。

きっと、自分たちの世代は、疲れ果てて社会へ出てしまったのだと夏彦は思った。何のための受験勉強だったのであろう。いい大学へ入るということが、まるで人生のすべての目的であるかの如き錯覚を与えられた。しかし、いい大学に合格した者たちの大半は、大きな傘の下での組織人となって、街の中で埋れていく。小学校で疲れ果て、中学校で疲れ果て、高校でとどめの疲弊を得て大学に入ると、そこでやっと解放され、もう勉強なんかこりごりだという心持ちになっていく。

しかも、そんなにも自分の青春をすりへらして入学した大学は、適当に講義を受け、適当に単位さえ修得すれば卒業させてくれるのだ。みんな、馬鹿になって当たり前だ。柔軟な心の時代に、真に豊かなものに触

れず、受験勉強に追い立てられ、やっと自由な時間を得たときには、ありとあらゆる快楽と怠惰が口をあけて待っている。この国の教育制度は、青年を愚かにするための巧妙な罠だ。

少なくとも我々の世代以前までは、このような大学教育観にうなずく人々も多かったはずである。しかし、その後、大学の教育制度と環境は大いに変化した。カリキュラムは精度を高めることを求められ、授業時間についても管理の厳格化が進んだ。ただ、その結果、学生たちが本当に大学での学修を楽しみ、いわゆる3つの学力などを効果的に身に付けているかといえば、おぼつかないと言わざるを得ない。学生たちが遅ればせながらにでも「真に豊かなものに触れる」ためには、大学はどのような用意をすればよいのか。

本学においても、教育における内容充実に加えて、手法の最適化についての議論を始めた。教育効果の最大化を目指す方法の模索を、これからの本学における教学に関わる議論の中心に置くことにしている。その手始めに、2020年10月からは組織改編し、教務部に教学企画課を新たに設置して、このことに取り組み始めている。

ホームカミングデーでの対談の様子

2. 伝統の学院と戦後の大学設立

2018年、追手門学院は130周年を祝った。1888年に、大阪偕行社附属小学校として、大阪城の大手前に産声を上げた学院は、中学校、高等学校と順に教育機関として発展し、1966年、ついに念願の大学設立に至った。現在は、こども園から大学院までの総合学園である。ちなみに追手門とは、大手門とも呼ばれる城の正門のことで、大阪城との所縁を示している。

大阪のある程度以上の世代の人々には、未だに「偕行社」という名の方が、とおりが良いようである。創設者は、後の陸軍大臣で陸軍中将の高島鞆之助である。高島はかの乃木希典の媒酌人であり、乃木は日露戦争の凱旋を、明治天皇に続いてまず高島に報告したとされる。2人の映る短い記録映画も残されている。

高島の東京での邸宅は、現在、上智大学のクルトゥルハイム聖堂として用いられている。

また、同志社香里中学校・高等学校の前身は、大阪偕行社中学校(のちに第2山水中学校と改称)であり、戦後に同志社の系列に入った。

このように、学院としては明治から続く伝統校であるが、比較的歴史の浅い大学は、2016年に、50周年を祝ったばかりである。

『追手門学院130年志』は、別に「改革の10年　2008—2018」という副題を持つ。この10年で、理事会改革から始まる画期的なガバナンス改革が進み、学院の組織や意思決定のシステムは大変革を遂げた。特に大学は、2020年度入試において、8年連続志願者増を達成した。しかし、改革の真の成果が問われるのは、これからの教育の中身についてである。現在最も腐心しているのは、追手門学院大学としての特色ある教育の確立である。

学生にとって、最大で最適の効果を上げる教育方法を探求し続け、毎年更新していくこと。これを、これまでの「行動して学び、学びながら行動する」教育実践とともに推進していくことにしている。

2019年に開設した茨木総持寺キャンパス(アカデミックアーク)

3．教育における制限と効率

しかしながら大学で行われる高等教育は、自由なようで実はさまざまな手枷足枷がかけられていて、学院の構成員がたとえ全員一致して改革を目指しても、個別の場所にはさまざまな困難が降りかかってくる。大学では２０２１年度から、学年暦を１０５分13週に変更することを決めたが、その準備のために、学習時間の制約や修得単位数など、大学の教育をめぐる制約の多さに改めて気づくこととなった。

また、単位は学修時間の総数に対して与えられることになっているが、労働時間の計算の援用から始まったことからもわかるとおり、そこには学修効果による差異は加味されていない。例えば同じ科目を履修しても、ある人は4単位、ある人は2単位、というような差異があるのなら、学修意欲はもっと高まるかもしれない。しかし、時間に基づく計算にそのような選択肢はない。これが、教育効果を上げる最適な方法かどうかは、議論が必要であろう。

その一方で、ＧＰＡ(Grade Point Average)制度も導入され、奨学制度にも連動している。

このような平等主義と競争主義の混在が、教育の現場で効果的に機能しているのであろうか。本来は、もっと別のところに、学生たちの学修意欲を高める根拠を求めるべきであろう。その上で効果的なカリキュラムが整備され、意欲と制度の相乗効果で学生が自ら成長することが、教育の理想である。そのために大学は何ができるのか。

教員になりたての頃、大阪のとある芸術大学の文芸学科で非常勤講師として、小説の書き方を教えていたことがある。この時最初にぶつかった質問が、大学で小説を学んで小説が本当に上手く書けるようになるのか、というものであった。殊に芸術作品などの創造には、このような疑問が付きものであろう。では、大学の文芸学科などというものは無用の長物なのであろうか。

ある人々にとってはそうかもしれない。しかし、小説の書き方にも、最低限のルールやマナーのようなものから、ある時、天から突然降りてくるひらめきのようなものまで、さまざまなレベルが存在する。個人のひらめきに委ねられるような才能ではなく、広く小説なるものを書いたり読んだりする際のコツや目の付けどころなどは、知っておいて損は無い。これらを効率的に学ぶには、大学において講義で一定程度学び、執筆経験豊かな教員から指導を受けることが、絶対的

ではないが、自らの才能を開花させる近道かもしれない。そのように学生にも、また自分にも言い聞かせながら、教壇に立ち続けていた。

30年近くも大学教員を続けてきて、もっとこのあたりについて、うまく言えるようになっていても良いはずであるが、未だに効果的な教育を求めての模索は、このような問いかけの延長線上にある。

4．教育理念達成のための3つの合言葉

宮本輝氏は、先に紹介した対談の中で、学生たちへのメッセージとして、「背伸びしてでも」「若いときに、いい小説を読むべきなんです」と述べ、さらに具体的に、1年時にトルストイの『戦争と平和』、2年時に島崎藤村の『夜明け前』、3年時に『ファーブル昆虫記』、そして4年時にユゴーの『レ・ミゼラブル』といういわば長編小説読書のカリキュラムを例示し、「これだけ読んだら十分です」とも述べた。

おそらく氏が述べたかったのは、それぞれの作品の重要性だけではない。むしろ極端に言えばどんな作品でもよいので、とにかく長編小説という、取り組むのにややハードルの高い作品に挑戦し、これを4年間続けることの大切さだと思われる。

これは、なぜ大学で学ぶのか、何を大学で学ぶのか、という問いにも通じる考えであろう。具体的な、専門的な学問内容を学ぶことはもちろん大切であるが、それとともに、いわば学ぶこと自体の大切さをも学ぶ、学び続けることの大切さも知る、ということが、高等教育においてもより大切であると考えられるのである。

学長に就任するに際し、「Student First」「ブランド化」「笑顔づくり」という3つの言葉を、本学の教育理念を達成するための大学運営方針の合言葉として掲げた。

学生第一は言うまでもないことであるが、「Student First」は学生に向かっての言葉ではなく、教職員に向けての再確認のための言葉である。「ブランド化」は、私学の創立の理念を現代につなぎ、これからの時代に良い教育を多くの学生に提供するために必須と考える。さらに、キャンパスはもちろん、職場にも笑顔があふれるような雰囲気づくりを進めたいと考えている。

これらは全て、学生たちが大学の4年間に留まらず、生涯学び続ける力を付けてほしいと願うからである。

学生たちが集うラーニングスペース WILホール（2019年撮影）

社会に出る学生には、何より人と人とのつながりの大切さを伝えたい。人が何かにつまずく場合、その原因は人間関係のこじれであることが大半である。一方、何かを学ぶのも、人からであることが原則である。人はたった一人で生きていけないから社会性が必要となるが、悩みも社会の中の人間関係から生じてくる。だからこそ、これに対応する力を、学生時代にしっかり学んでほしい。それは、それぞれの学問や研究、専門領域を学ぶことと同時並行に行われているはずである。なぜなら、知識だけでは生きた社会に活用できないからである。それは常に、人との関係性の中で動き始める。卒業論文を書けば研究が完成するのではなく、大抵はそこが学びの出発点である。人間関係の学びも同様である。

一生かけて、この人間関係について学び続けることを勧め、これを卒業する学生たちへの本学からの餞（はなむけ）としたい。大学の教育が、まだまだ学びのほんの入口であること。ここから、高等教育の可能性をできる限り拡げたい。その成果は、卒業生一人一人の姿という形で、正直に示されることになろう。その時、学び続ける積極的な顔を卒業生が示してくれることを心から願っている。